

④研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
第36回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会（保修11）	保存修復科学センター	63
平成24年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（企10）	企画情報部	64
第7回無形文化遺産部公開学術講座（*無01）	無形文化遺産部	65
無形民俗文化財研究協議会（*無02）	無形文化遺産部	65
保存修復科学センター研究会（*保修03）	保存修復科学センター	66
伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会（*保修06）	保存修復科学センター	66
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（*保修07）	保存修復科学センター	67
総合研究会（企）	企画情報部	67
企画情報部研究会（企）	企画情報部	68

- *注 ・第7回無形文化遺産部公開学術講座は、無形文化財の保存・活用に関する調査研究（①無01）の一環として実施した。
- ・無形民俗文化財研究協議会は、無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（①無02）の一環として実施した。
 - ・保存修復科学センター研究会は、文化財の保存環境の研究（①保修03）の一環として実施した。
 - ・伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会は、伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究（①保修06）の一環として実施した。
 - ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究会は、近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究（①保修07）の一環として実施した。

第36回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 「文化財の微生物劣化とその対策：屋外・屋内環境、及び被災文化財の 微生物劣化とその調査・対策に関する最近のトピック」(④必修11-12-1/1)

屋外・屋内の環境を問わず、微生物は文化財にとっての大きな劣化要因として多大な被害を与えている。東日本大震災における経験は記憶に新しいところであるが、とくに地震・津波などによって被災した文化財については水濡れなどの影響から、微生物劣化が短期間のうちにおきやすく、その状況をみきわめるための調査と対策がきわめて重要となっている。保存修復科学センターでは、標記の国際研究集会シンポジウムを開催した。15件の招待講演のほか、国内外から23件のポスター発表が行われ、活発な議論が行われた。参加者へのアンケート調査では、「とても有意義」61%（実数53/87）、「有意義」37%（実数32/87）、「妥当」2%（実数2/87）、「物足りなかった」0%（実数0/87）、という結果であり、回答者の過半数が満足感をえたことがわかった。

日程：2012（平成24）年12月5日（水）～7日（金）、会場：東京国立博物館平成館大講堂

参加者数：参加者数232名（うち外国からの参加者は講演者、参加者20名）、3日間のべ参加者数421名

【セッション1】基調講演：座長・石崎武志（東京文化財研究所）

ピエロ・ティアノ（文化遺産保存研究所、イタリア）

「石造文化財の生物劣化の特徴と問題点、および劣化の程度と処置を決定するための診断法に関する最近のトピックスについて」

ジュヌビエーブ・オリアル（歴史記念物研究所、フランス）

「文化財の生物劣化の調査方法の概要と予防措置および最近のトピックスについて」

【セッション2】東日本大震災で津波に被災した文化財の微生物被害とその対策：

座長・岡田健（東京文化財研究所）

建石徹（文化庁）「東日本大震災における地震、津波による文化財への影響について（概要）」

木川りか（東京文化財研究所）「津波で被災した文化財の微生物被害と殺菌燻蒸処理上の問題点」

佐藤嘉則（東京文化財研究所）「津波で被災した紙質文化財の生物劣化に関わる微生物群の調査」

【セッション3】石造文化財の着生生物による劣化とその対策：座長・犬塚将英（東京文化財研究所）

朽津信明（東京文化財研究所）「石造文化財の着生生物による劣化と環境」

森井順之（東京文化財研究所）「石造文化財着生生物のクリーニングについて」

【セッション4】石造文化財の微生物劣化とその対策：座長・高妻洋成（奈良文化財研究所）

片山葉子（東京農工大学）「カンボジアのアンコール遺跡における石材の微生物劣化について」

顧繼東（香港大学、中国）

「石材の保存に使用される高分子化合物の微生物劣化／分解と殺菌剤の使用にかかわる問題点」

【セッション5】木材腐朽菌による生物劣化の調査と対応：座長・三浦定俊（文化財虫害研究所）

フェイスル・ブースタ（歴史記念物研究所、フランス）

「歴史的建造物の木材腐朽に関わる要因：同定、処置と予防対策」

藤井義久（京都大学）「非破壊調査法などによる日本の歴史的建造物の生物劣化調査」

杉山智昭（北海道開拓記念館）「遺伝子解析による歴史的木造建築物の腐朽調査」

【セッション6】屋内環境におけるカビの問題と調査手法：

座長・佐野千絵（東京文化財研究所）、神庭信幸（東京国立博物館）

高鳥浩介（東京農業大学）「文化財保存施設における浮遊菌の調査手法」

ウィブケ・ノイゲバウアー（デルナー研究所、ドイツ）

「DNAチップによる美術品のカビの迅速同定法の開発」

トム・ストラング（カナダ保存研究所、カナダ）

「文化財に対するカビのリスク：害になる環境条件や潜在的な被害の可能性を規定する上での問題点について」

【総合討議】座長・顧繼東、木川りか

平成24年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（④企10-12-2/5）

第46回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」

企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年度で46回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。昨年に引き続き「モノ／イメージとの対話」とのテーマを掲げることとした。個々の講演内容は以下の通りである。今年度は、台東区区政60周年にちなみ、上野にかかわるテーマを選んだ。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ176人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、120人から回答を得た（回収率：68.2%）。結果は、「たいへん満足した」47人、「おおむね満足した」44人、「普通だった」15人、「不満が残った」0人、回答者の75.8%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2012（平成24）年10月19日（金）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・山梨絵美子（東京文化財研究所）「徳川霊廟を描いた画家たち」

近代絵画史の主流には位置づけられて来なかったが、明治期には日光や東京の徳川霊廟を描いた水彩画が多数制作された。それらの作者は工部美術学校に学んだ画家たち、五百城文哉とその周辺、及び河久保正名とその周辺という3つのグループに分類できる。本レクチャーでは、それらの画家たちとその作例を紹介するとともに、それぞれの画風の特色を明らかにし、制作の背景について考察した。

・白適銘（台湾師範大学）「上野モダンから近代文化体験へー陳澄波が出会った近代日本ー」

1926年、東京美術学校在学中であった陳澄波は台湾人として初めて帝展西洋画科に入選した。それ以後、帝展、台展など官展での受賞を重ね、日本植民地時代の台湾及び上海で現代美術の指導者として大きな役割を果たした。彼は東京美術学校在学中（1924-29）に上野を中心に東京の各地を訪れ、数多くの作品を残している。それらの作品から、陳澄波がいかに現代美術の発信地であった上野で「技」を身につけ、現代風景のイメージを作り出していたか、また、現代化によって生まれた美術・文化や日本近代の美術社会の実相を、知識のみならず「心」で体感し、「現代画家」というアイデンティティを構築していったかを考察した。

第2日：2012（平成24）年10月20日（土）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・丸川雄三（国際日本文化研究センター）「連想が結ぶ美術史の点と線ーアーカイブスから見えるものー」

明治大正期を代表する洋画家である黒田清輝の生涯を、東京文化財研究所が蓄積する豊富な資料そのものに語らせることはできないだろうか、と考えた。本レクチャーでは、黒田清輝の作品や写真などのイメージと、日記や著作などのテキストとを相互に関連づける具体的な取り組みを紹介し、ある画家の作品や人物の成り立ちを、多様な情報源から直接感じ取ることができる「連想するアーカイブス」の可能性を探った。

・田中淳（東京文化財研究所）「1912年10月20日・上野・美術」

100年前の1912（大正元）年10月の上野では、第6回文部省美術展覧会が開催されていた。この当時は、連日多くの観衆を集め、美術の鑑賞が大衆化されていた時代だった。同時に、この年を前後に、美術は大きく変化する兆しがあらわれている。本レクチャーでは、この100年前の時代と上野に焦点をあて、「個性」、「自己」を基点にした近代的な精神の拡充を背景にした、新しい芸術の誕生の様相を述べた。

第7回無形文化遺産部公開学術講座 (①無01-12-2/5の一部として実施)

12月8日、東京国立博物館平成館大講堂において、山口鷺流狂言保存会を招聘して公開学術講座を行った。タイトルは「山口鷺流狂言の伝承を考える—東京文化財研究所無形文化遺産部所蔵記録をめぐって—」。入場者数243名。

プログラム

講演Ⅰ 稲田秀雄（山口県立大学教授）「山口鷺流狂言の歴史と位置」

実演Ⅰ 宮城野（萩大名）

講演Ⅱ 高桑いづみ（東京文化財研究所）「無形文化遺産部所蔵記録『山口鷺流狂言の小舞謡』の意義」

実演Ⅱ 不毒

実演 山口鷺流狂言保存会

無形民俗文化財研究協議会 (①無02-12-2/5の一部として実施)

無形文化遺産部では、無形民俗文化財の保存・継承に寄与することを目的として、毎年無形民俗文化財研究協議会を開催してきた。第7回にあたる本年度は、昨年度からの継続テーマとして「記憶・記録を伝承する—災害と無形の民俗文化」を取りあげた。災害という局面において無形の文化を守り伝えるために「記録」をどのように捉え実践するのか、報告・総合討議を行った。その成果は報告書として刊行した。

日時：2012（平成24）年10月26日（金）10：30～17：30

会場：東京国立博物館平成館

参加者：160名

テーマ：記憶・記録を伝承する—災害と無形の民俗文化

内容：

【発表】

飯坂真紀（ふるさと岩手の芸能とくらし研究会）「津波から100kmのまちで」

小谷竜介（宮城県教育庁文化財保護課）

「被災地における民俗調査の在り方—震災前からの調査と震災後からの調査—」

阿部武司（東北文化財映像研究所）「記録DVD『3.11東日本大震災を乗り越えて』について」

大山孝正（福島県文化財センター白河館まほろん）

「民俗資料・記録の活用に向けて—福島県の被災地から—」

長坂俊成（（独）防災科学技術研究所）

「被災者と人類のための災害復興アーカイブ—311まるごとアーカイブスの取り組み—」

【総合討議】

上記報告者と下記コメンテーター、コーディネーターによる総合討議を行った。

コメンテーター：久保田裕道（儀礼文化学会）、齊藤裕嗣（東京文化財研究所）

コーディネーター：今石みぎわ（無形文化遺産部）

総合司会：宮田繁幸（無形文化遺産部）

保存修復科学センター研究会（①必修03-12-2/5の一部として実施）

近年、LED照明は著しい進歩し、熱線を発生させない、省エネ効果が期待できる、などの理由から、その導入について対応を検討している博物館・美術館も多いが、「白っぽい」「まぶしい」「点状に映り込みができる」「演色性がまだ低い」など、いろいろな欠点も指摘されている。現段階でLED照明の最先端技術の情報を集約・検討するとともに、LED照明が省エネに果たす役割について整理する目的で本研究会を企画した。

日 程：2013（平成25）年2月18日（月）

会 場：東京文化財研究所地下セミナー室

参加者：130名

講演者：佐野千絵（東京文化財研究所）「趣旨説明」

藤原工（株式会社灯工舎）「LED照明の基礎と現在」

河野通孝（山口県立美術館）「山口県立美術館のリニューアルとLED照明導入の効果」

宮下猛（シーシーエス株式会社）「紫色励起LED照明による文化財影響について」

高梨光正（国立西洋美術館）「LED照明導入と省エネの状況」

吉田直人（東京文化財研究所）「LED照明に関する全国アンケート結果」

意見交換

伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会（①必修06-12-2/5の一部として実施）

平成24年度は、各種伝統的な修復材料のうち建築文化財における塗装彩色部材の劣化と修理を主なテーマとして取り上げた研究会を開催した。この研究会は、平成21年度に開催した第3回研究会の「建築文化財における漆塗料の調査と修理 ―その現状と課題―」、平成23年度に開催した第5回研究会の「建築文化財における伝統的な塗料の調査と修理」の続編ともいえる内容である。建築文化財の外観などに塗装彩色された材料や部材は、日本の気候風土の中では材質劣化や生物劣化が起こる場合が多く、これらの修理がくりかえし行われてきた歴史がある。研究会では、このような建築文化財における塗装彩色部材にみられる劣化とその修理に関する諸問題を、保存修復科学（塗装彩色材料及び生物学）・建造物の修理現場・行政指導それぞれの立場から、最新の情報を提供いただいた。研究会では、まず北野が塗装彩色の材質劣化について述べ、生物科学研究室の木川りか室長から塗装彩色を含む部材の生物劣化として、主に日光社寺文化財の虫害と霧島神宮のカビ被害とその対処事例に関する話題提供をしてもらった。続いて実際の建造物修理担当者である京都府教育庁指導部文化財保護課の島田豊氏から石清水八幡宮の塗装彩色修理、平等院鳳凰堂の塗装修理に関する事例報告、巖島神社工務所の原島誠氏から巖島神社社殿建造物の塗装修理に関する事例報告をそれぞれ頂いた。最後に文化庁文化財部参事官（建造物担当）の豊城浩行氏から、現在文化庁が塗装彩色部材の修理を行う上での基本的な考え方に関する概要説明を頂いた。研究会のテーマが塗装彩色の修理に直結した内容であることから関係者の関心が高く、合計125名の参加者を得た。さらに講師の方々のお話は、それぞれ専門の立場からの話題提供であっただけに説得力もあり盛況であった。

第6回「建築文化財における塗装彩色部材の劣化と修理」

日 時：2013（平成25）年1月24日（木）13：20～17：30

会 場：東京文化財研究所セミナー室

講演者：北野信彦（東京文化財研究所）「建築文化財における塗装彩色の材質劣化」
木川りか（東京文化財研究所）「建築文化財における塗装彩色を含む部材の生物劣化」
島田豊（京都府教育庁指導部文化財保護課）
「京都府下建造物における塗装彩色部材の劣化と修理（事例報告）」
原島誠（巖島神社工務所）「巖島神社社殿建造物における塗装部材の劣化と修理（事例報告）」
豊城浩行（文化庁文化財部参事官〔建造物担当〕）
「建築文化財における塗装彩色部材の修理の考え方」

近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（①必修07-12-2/5の一部として実施）

平成24年度は、近代化遺産の中でも「動く美術工芸の粋」とも言われる御料車に関して開催した。皇族らの専用車両という特殊性故に、日々の掃除や修復等通常の列車や客車とは別の扱い方あるいは考え方が必要である。そのような御料車に関して、保存修復に携わっている方々や鉄道史、鉄道技術の専門家など5人と台湾の方1人を招き、保存や修復に関する事例紹介を通じてその考え方や難しさを知るとともに活用方法等を討論した研究会を実施した。

第26回「御料車の保存と修復及び活用に関する研究会」

日 時：2012（平成24）年11月30日（金）10：00～17：00

会 場：東京文化財研究所セミナー室

講演者：中山俊介（東京文化財研究所）「御料車の保存と修復及び活用」
堤一郎（東京文化財研究所）「日本における御料車と技術史面での意義」
嶋立良晴・田邊優子（鉄道博物館）「鉄道博物館の御料車」
中野裕子（博物館明治村）「御料車の保存と公開」
山下好彦（東京文化財研究所）「御料車における内外装の保存処置—解体部材の事例を中心に—」
石井美恵（東京文化財研究所）「御料車の内装染織品の保存処置」
黄俊銘（台湾・中原大学）「台湾の御料車について」

総合研究会（④企）

所内で開催する総合研究会は、企画情報部が担当する。各研究部・センターの研究員がテーマを設定してプロジェクトの成果を研究発表し、テーマに関して所内の研究者間で自由討論するシンポジウム形式をとっている。平成19年度より独立行政法人国立文化財機構に対し、総合研究会の案内を通知している。平成24年度は下記のスケジュールで実施した（会場：東京文化財研究所セミナー室）。

- ・第1回 2012（平成24）年9月4日（火）
二神葉子（企画情報部）「第36回世界遺産委員会」
- ・第2回 2012（平成24）年10月2日（火）
岡田健（東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会）
「文化財レスキュー事業の進行状況とこれからの課題」
- ・第3回 2012（平成24）年11月9日（金）
飯島満（無形文化遺産部）「音声資料のメディア変換をめぐって」
- ・第4回 2013（平成25）年1月15日（火）

④研究集会・講座等

- 山内和也（文化遺産国際協力センター）「バーミヤーン大仏の再建について」
・第5回 2013（平成25）年2月5日（火）
小林公治（企画情報部）「南蛮漆器成立・製作の経緯と年代再考－中間報告－」
・第6回 2013（平成25）年3月5日（火）
佐藤嘉則（保存修復科学センター）「文化財の微生物劣化研究に関する課題」

企画情報部研究会（④企）

企画情報部ではほぼ月に1度のペースで美術史研究者による研究会を開催、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに議論によってその充実を図っている。平成24年度は下記のような研究会が行われた。

- 4月10日（火）前田環（東京藝術大学、日本国際交流基金ビジティング・スカラー）
「20世紀初期に於ける日中美術交流史の断面：内藤湖南を中心に」
- 5月29日（火）二神葉子（企画情報部）
「国宝文化財建造物の地震対策と課題―地震動予測地図との連携の可能性―」
- 6月26日（火）金子牧（カンザス大学、東京文化財研究所来訪研究員）
「『国民的画家』の表出：アジア・太平洋戦争期と戦後の『山下清ブーム』」
- 7月17日（火）キム・ヨンチョル（韓国・全州大学校）
「近代の日本人による高句麗古墳壁画の調査と模写、そして活用」
- 8月3日（金）塩谷純（企画情報部）、竹上幸宏（国宝修理装演師連盟）、荒井経（東京藝術大学）、
平論一郎（東京藝術大学）、小川絢子・三宅秀和（永青文庫）、林田龍太（熊本県立美術館）、
佐藤志乃（横山大観記念館）、野地耕一郎（練馬区立美術館）
「『美術研究作品資料 横山大観《山路》』刊行に向けての研究協議会」
- 9月25日（火）太田彩（宮内庁三の丸尚蔵館）、小林達朗・城野誠治（企画情報部）
「宮内庁三の丸尚蔵館所蔵春日権現験記絵共同調査の中間報告」
- 11月15日（木）田中伝（成城大学大学院）「吉川霊華筆《離騷》の主題と典拠に関する一考察」
相澤正彦（客員研究員・成城大学）「石山寺縁起絵巻の絵師再考」
- 12月25日（火）吉崎真弓（国立情報学研究所）「『萬朝報』投稿漫画欄「端書ボンチ」（1907-1924）の研究」
三上豊（客員研究員・和光大学）「マンガを学生にどう伝えるか」
- 1月29日（火）津田徹英（企画情報部）「研究資料 滋賀・十輪院 木造地藏菩薩立像」
寺島典人（津州市歴史博物館）「快慶・行快の造った耳と長浜市浄信寺像について」
- 2月26日（火）大谷省吾（東京国立近代美術館）「巖光《眼のある風景》をめぐって」
- 3月19日（火）綿田稔（企画情報部）「ギメ本大政威徳天縁起絵巻について」
水野裕史（奈良文化財研究所）「近世初期における鷹狩図の流行―『野行幸』と『鷹書』―」